

語り 小島マスエさま

時を超えて風にいたり

聞き書き 鈴木礼子

生まれは葉山

はじめまして。小島マスエです。

生まれは大正十三年。そう、百歳です。

とてもそんな年齢に見えないから、みんなにビックリされるでしょうって？

そんなことないです。私に年を訊ねるような方はいませんから。

生まれは葉山^一です。海がとてもきれいなところです。

ご存知でしたか？

^一 葉山町は神奈川県三浦半島西部に位置し三浦郡に属する郡内唯一の自治体。明治二十七年に建てられた御用邸のある町として有名。

葉山の山側は避暑地で御用邸もあるところですからね。

私の家は、海側の森戸です。

左手には一色、右手は鎌倉や逗子につながる海の近くです。

魚は新鮮で美味しいところです。すぐ近くで獲れる魚ですからね。

そんな大きなものはなくて、アジとかシラスとかです。

「ナマシラス」が有名かって？ ああ、私はあまり好きじゃなく

て、ナマでは食べませんでしたが、ナマシラスがあるくらい新鮮っ

てことです。

街中には、魚屋さんが数軒あって、いつも獲れたての新鮮なお魚

が並んでいました。

森戸の海

森戸海岸^二は家のすぐ近くで、私たちの遊び場でした。

二 森戸海岸は、芝崎、一色海岸、小磯、長者ヶ崎海岸という砂浜と岩礁が交互に連なっている南北四キロメートルにおよぶ美しい葉山海岸線の一つ。平成八年には「日本の渚・百選」にも選ばれている。



夏休みなどは、毎日のように海に遊びに行っていました。

妹や弟は海辺で遊んでいましたが、私は泳ぐほうが好きでしたね。

遠くに浮かんでいる・・・そうそう、木で造られている二メートル四方の筏みたいなのところに向かって、「あそこまで行こう」と友達と泳いでいくんです。そこでちょっと息を整えてから、次の沖合にある櫓みたいなもの、私たちは「スタンド」って呼んでました。そこを目指してまた泳ぐんです。スタンドは沖に向かって二つくらいありました。

沖合まで出て行くなんてキケンじゃないかって？

いいえ、危ないことはありません。大丈夫ですよ。

そのスタンドには横木が組まれていて、登った上から眺めると知っているはずの景色が変わるんです。いつもは家の庭から眺める海だけど、その海の上から家を眺めることにワクワクしました。

そのスタンドに登って少し休んでから、さらに遠くにある次のスタンドまでまた一生懸命泳いだものです。

岩場あたりでは、アサリ採りもしました。潮が引いている時だけでしたが、それでも家族が食べるくらいの量にはなって、お味噌汁にしてくれました。美味しかったですね。

とにかく、泳ぐのが大好きだったし得意でしたよ。



でも、潜るのは出来なかったんです。小学校三年生の時と六年生の時に中耳炎に罹ってしまったのでね。近くのお医者さんで診てもらっていましたが、手術が必要ということになって田浦の病院に一週間入院しました。葉山にはそんなに大きな病院がなかったので、田浦まで行っただけです。それでもやはり聴こえが悪くなってしまうましたけどね。だから、潜って遊ぶことはできませんでしたが、海遊びはすごく楽しかったです。

夏休みは、宿題終えてからでないと行かせてもらえませんでしたから、妹も弟も一生懸命になって宿題を済ませました。そして宿題が終わるなり、裸足で飛び出して行ったものです。

サンダルですか？

そんなもの履きませんよ。裸足のまま海まで走って行くんです。

浜には、ビーチパラソルが所々にあって、そこにタオルや羽織ってきた洋服などかけておきましたけど、なくなるなんてことは一度もありませんでした。

ああ、今じゃ、そんなことできませんね。



名島（なしま）

森戸の海の沖合には、名島^三という小さな島がありました。今でもあります。

さすがに泳いではいけないところでしたから、近所の漁師のおじさんが、時々「行くか」って声をかけてくれてるのが嬉しくて。手漕ぎの船で連れて行ってくれたんです。

私のきょうだいや漁師のおじさんの家族と一緒にね。一日遊んでも飽きないところでしたから、おにぎりを持って行くこともありました。

島のあたりはとても水が澄んでいるから、魚が泳ぐのが見えるんですよ。楽しかったですね。

昔はそんなふうに、地元の人との行き来があったんです。

今はそんなことないでしょ？

良い時代だったけど、代わりに隠し事は何にもできないですよ。なにしろ、全部わかつちやうんですから。

三 名島は、森戸海岸沖一キロ以内に浮かぶ無人島。葉山海岸花火大会の打ち上げ場所で、夏場は渡し船が出る。周辺は海の透明度が高くシュノーケリングや磯遊びができる人気の島。

おてんばさん



私は泳ぎだけでなく、運動も得意でした。運動会といったらかけっこでしょ。私ね、速かったですよ。いつもリレーの選手でしたから。

はい、おてんばだったんです。

そういえば、女の子なのに父の自転車に乗っていました。黒くて大きな自転車です。

この写真は、海岸の近くの通りですね。写真を撮ってくれたのは、父親のところに遊びに来た人でしょうか。いつもずいぶんたくさんの方が父親のところに来ていましたから。誰かが見えるとお茶やお料理を運んだものです。

そういえば、父親の仕事先に忘れ物を届けに行くのも私の役目でした。その時は、自転車ではなく歩いて行きましたけどね。

小菅の家

実家は小菅（コスゲ）といって、地元によく古くから代々続く家で、近くには「小菅」の名前の親族がたくさんいました。父の上に祖父、曾祖父・・・多分その前から続いていた家だと思います。後継ぎの弟には子どもがいるので、これからも代々続くのでしょうか。

父は厳格な銀行員で、子どもたちの躰にも厳しく、ほとんど話したこともなかったような気がします。とにかく軽口で話せるような父ではありませんでした。

祖父母と両親、それから自分たち子どもが五人。すぐ下の妹は二つちがいで、その下に妹と弟がいます。もう一人弟がいましたが小さい時に亡くなりました。

祖父母の言いつけも絶対でした。みんなで一緒に食卓について、「いただきます」の挨拶をしなくてもすぐには食べられませんでした。

なぜって言うと、上座に祖父母がいて、その祖父母が箸をつけてから、ようやく私たちは食べ始めることができるんです。それが、家の決まりでした。

弟は男ですから、食事で座る場所も私より両親に近い場所に座っていました。用事だと言いつけられることなんかないですよ。男、特に跡取りは、小さい時からちゃんと大切にされるような存在なんです。

そんなことは、当たり前だと思っていましたよ。今の人には考えられないでしょうね。今でもお行儀が良いのはそのせいですねって？

そうですか？

まあ、それはわかりませんが、そのおかげで、目上の人に礼を尽くすことを大切にしてくれました。

男に生まれたかっと思つたこと？
ええ、ありますよ。女だからという理由で出来なかつた
ことはたくさんありましたから。

庭から見える景色

家にはまあまあの広さの庭があり、その中ほどに小さい
けれど離れも東屋もありました。そこからは目の前に海が、
そして遠くの方には富士山が見渡せました。

夕陽が落ちていく景色^四が見えるのも当たり前でしたよ。

四 森戸海岸は夕陽の名勝。(下写真)



楽しみなお茶運び

家から少し離れたところに畑があったんです。こう、上と下の段になっていて、家族が食べる程度の野菜を作っていました。畑をしていたのは祖母と母です。畑仕事に出る時は、着物を着替えて行くんです。長い時間の作業になるので、途中のお茶運びが私の役割でした。ちょっとした坂道になっているところをよく歩いて通いました。

お茶と一緒にお菓子をお盆に載せて運ぶんです。それは楽しみでしたよ。

だって、私、その頃から甘いものが大好きでしたから。あんこを丸めてまわりに小麦粉つけて焼いたようなお菓子を母とよく作りました。父も甘いものが好きだったんです。こしあんが好きというので、父の分だけはこしあんを作ったりしてね。

近くに駄菓子屋さんがあったので、そこで買ってくることもありました。

甘納豆やぎらめの甘辛のおせんべいとかね。

今もおせんべいは大好きです。左の奥歯がないけれど硬いものだって食べられますよ。

元気な秘訣は、硬い物でも食べられることかもしれないですね。
大きな病気にはかかったことはありません。



母の名は「せん」さん



母は二文字の名前が多い明治の生まれです。

その後は名前の最後に「〇〇え」が付く時代。私の時代ですね。それから、「〇〇子」の時代になるんです。

母は群馬の出身でした。どんな縁で葉山に嫁いできたのか知りませんが、祖母がいたのでかなり苦労していたようです。母は私にだけはいろいろな頼みごとをしました。それも長女の役割として、「これお願いね」と言われたことは、何でも「はい」と答えて動いていました。

そう言われれば、私はずいぶん母に頼りにされていたのかもしれないですね。

その点、妹は違う意味でしっかり者でうまくやってきました。私とは全然タイプが違うんです。

写真は晩年の母と出かけた時の写真ですね。この母も九十八歳で他界しました。

ドレスメーカー女学院

女学校を卒業した後は、洋裁学校に通いました。私はもつと遊んでいたかっただけど、そんなわけにはいかず、洋裁学校に行かされました。ドレスメーカー女学院^五という所です。

はじめは、「裁断科」から始まり、「研究科」、「師範科」って進んで、その後に「裁縫部」に進みました。製図からすべて学ぶんです。裁縫部にまで進む人は少なかったです。私は、最後には教師として生徒に洋裁を教えました。クラスは今の小学校の半分くらいで、二十人位の生徒さんだったでしょうか。

当時は、高島屋の一角に、洋服を作ったり、直したり・今でいうリフォームですね、そういう場所があったんです。生地のない時代でしたからね。新しく買うんじゃないくて、今まで着ていたものをお預かりして、お客様がご希望されるデザインに変えてお作りし直したんです。そういう仕事も、学校で請け負っていたんですよ。

^五ドレスメーカー学院 一九二六年（大正十五年）、杉野芳子が、東京市に「ドレスメーカー・スクール」として開校し、その手法を取り入れた学校が全国に拡がる。現在の小笠原学園は、一九三五年創業、「逗子ドレスメーカー女学院」としてスタート。和服文化から洋装へと移り変わる時で、洋服を作る学校として始まる。

ミシンはもちろん足踏みです。

はずみ車を右手で回し、ペダルをゆっくり踏み始めて・・・

カタカタカタカタ・・・

サラサラサラサラ・・・に近い音かしら。

リズムよく回っているあの音、心地よい音でしたね。

時代が変わって便利な電化製品が出てくると、ミシンも電動のものが出てきましたが、私はずっと昔から使ってきたミシンで通しました。壊れることも調子悪くなることもなく、私の思い通りにちゃんと動いてくれましたから。

今着ているいるジャケットのボタンホール？

これは手縫いです。ボタンホールより何より、一番苦労したのは、衿付けだったかしらね。何でも作っただんですけど、ズボンだけはどうもカッコよくできなくてあきらめたんです。だからこのズボンも既製品です。



当時の足踏みミシン



あら、これはまた、ずいぶん昔の写真なこと。

森戸の海岸で撮った写真のようですね。着ているワンピースは、自分で縫った洋服です。今着ているこのブラウスもベストも昔のものですが、私が作ったものです。

戦争時代

戦争が始まってからもずっと学校に勤めていましたが、いよいよ挺身隊に入ってご奉公に行くことになりました。イヤなんて言えません。誰もが行かなければならなかった時代です。

私が挺身隊で行った先は、横須賀の航空学校でした。葉山の方からは三人くらいで行くことになり、そこで本を作らされました。航空学校で使う教科書です。私たちはそれぞれ違う場所に分けられ、私は植字するところに行かされました。木枠の中に摘まみ上げた文字を置いてい

く仕事です。

はじめは寮に入るように言われましたが、自分の家以外のところに泊まるのがイヤでね。一緒に行った友だちと「家から通わせてほしい」と交渉しに行ったんです。そしたら、簡単に「いいですよ」ってお許しが出て、思いがけない返事でした。

そう、勇気だしてお願ひしに行っただんです。

だって、それまで家以外のところで寝泊まりなんてしたことなかったし、あつたとしてもすごく親しい親戚くらいなものでしたから。

そのかわり、通うのは大変でした。遠いだけじゃなく、歩いている途中で空襲警報がしょっちゅう鳴るんですから。鳴り始めると近くの防空壕に飛び込むんです。どうやら過ぎたようだと外に出て歩きはじめると、また空襲警報が鳴り、次の防空壕まで走りました。

そんなことを繰り返しながら通っただんです。

そうですね、走るのには速かったとはいえ、必死でしたよ。

終戦

終戦になった時は、横須賀から歩いて帰っただんです。長いトンネルをいくつも越えて。四つのトンネルの中は車がいっぱい、とてもまっすぐに歩けず、車の間を通り抜けながら歩きました。その時は本当に大変でした。歩いてても歩いてても遠くて……。

その時のことは今でも夢に見るんです。

.....

あまり思い出したくない出来事です。

はじめは戦争が終わったことが信じられなかったんです。

でも、そのうちだんだんわかってきて、やっと落ち着いた暮らしが送れるようになると思えてきてから、嬉しい気持ちがじんわりしてきました。

結婚

結婚は、恋愛じゃなかったように思いますよ。

はじめは、庭の離れに二人で住み、食事の時は家族のいるところで食べていました。しばらくしてから、近くにあった貸家が空いたのでそこに入り、のちに新築しました。

子どもは二人できました。女の子二人だったので、子どもたちの洋服はほとんど手作りで作りました。一生懸命作りましたよ。妹のものまでね。

生地は逗子まで買いに行くんです。父の自転車に乗って、二十分くらいだったと思います。

「アライ」さんは生地専門でした。

ボタンはボタン屋さんがあって、それぞれで買いました。子どもたちの洋服作りは楽しかった。

たですね。女の子だから作り甲斐もありましたしね。
お母さんの手作りの洋服、喜んでくれたでしょうって？
まあ、それはわかりませんが。思い出すだけでも楽しい時代でしたから、良かったんじゃないですか。

そして今

夫が亡くなった後も葉山で一人暮らしを続けました。

長女が近くに住んでいたんですけど、まだ子どもたちが手を離れていなくて。それで次女が心配して東京に呼んでくれたんです。

今は次女夫婦と三人暮らしです。

時々孫やひ孫たちが遊びに来て、賑やかな時もありますよ。





この写真は、昨年夏に私の百歳のお祝いで、千葉の勝浦に旅行に行った時のものです。孫やひ孫たちは海で遊び、私と次女の夫婦は近くのお寺や公園などをドライブしてきました。夜はみんな一緒に食事を楽しみました。

夏の暑い時期でしたが、楽しくて、疲れなんか全然なかったです。帰ってきてから、しばらく娘は私の体調を心配してくれてましたけどね。

そうそう、ホテルの食事の時、ひ孫と一緒に食べたデザートのコロレットやケーキ、とても美味しかったですよ。

もともと私は甘いものが好きなんです。中でもあんこが大好きで、毎日何かしらあんこを食べています。

娘も好きなので二人してね。

そう、おはぎとかね。

葉山から離れた寂しきですか？

いえ、もう充分すぎるほど葉山には長くいましたから心残りはないですよ。

先日、ちょっと肩を傷めましたけどもう大丈夫です。ほら、もう痛くなく動かせますから。

こんなに元気で丈夫な理由は何かって？

そうですね、あの葉山の砂浜で遊んで丈夫になったんじゃないかしら。

何しろ、裸足であの浜を駆け回ったんですから。きっとそうだと思います。

若者へのメッセージ

大そうなこととは言えません。私の時代より今の人のほうがいろいろと大変そうですね。うですから。

それでも、私が今まで大切にしてきたことって言えば、やっぱり目上の人や友人に対して、ちゃんと敬う気持ちを持って接するということでしょうか。

そういう気持ちは、自分の態度やふるまいに必ず現れますから。頭の片隅で良いから、そういう気持ちを持つことの大切さを感じています。

ずいぶんたくさんお話ししましたね。ありがとうございました。

(令和六年十一月十五日、十二月二十七日 令和七年一月十七日 於ソラノイロ学芸大学デイサービス)

